

2019年度 入学試験問題

国語

(第3回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「ナイノアと同じことを、私は今すぐ、なんの修業しゆぎょうもせずにすることができると私が センゲンaしたらみなさんはどう思われるだろうか。

多分、頭がおかしいか、とんでもない誇大妄想こたいたもうそうまぎょう狂だと思われるだろう。

「いや、私だけではない、二十一世紀に生きる者なら、誰だれでも、なんの志や才能がなくてもできる」と言ったらどうだろうか。

あきれるところか怒りの声さえ聞こえてくるような気がする。ところが、実際にそれができるのだ。

「GPS」、今やドライバーにとって日常のものとなりつつある例のカーナビさえあればよい。これさえあれば、誰にでもハイパータヒチ間五千キロの海を渡わたって古代カーナビを正確にタヒチに導くことができる。

A 荒れ狂う波の恐怖きょうふ、乏しい水と食料、トイレ（大小便）はカーナビの最後尾さいごうびにぶら下がって直接海に落とすわけだし、寝室は吹きっ晒さらしの甲板かんぱん、といった条件に耐えなければならぬ。

しかし、① ナイノアが成し遂げた最も困難なこと、すなわち、三百六十度見渡す限り水平線以外にも見えない大海原おおうなばらの真只まっただなか中で、カーナビの位置を誤差わずか数十メートルの範囲はんいで正確に特定し、タヒチの方角にまっすぐに導くことがGPSさえあれば誰にでもできるのだ。

「誰でも、いつでも、どこでも、間違いなく、繰り返し、安全に、簡単に同じことができるようになりたい」

これは、人間の根源的な欲望のひとつだ。人間は、そうなりたいと望んだからこそ、科学技術を生み出した。そうなることが人間にとっての「幸福」であり、「善きこと」であると考えたからこそ、科学技術を進歩させる道を選んだのだ。

《ア》

そして、この「幸福」や「善きこと」が現実のものになればなるほど、ナイノアが選んだ道から遠ざかっていった。自分自身の中に、科学技術の力を借りなくとも同じことができる「能力」が秘ひめられていることを忘れていった。いや、それを忘れてしまわなければ、今我々が恩恵おんけいを受けているさまざまな進歩した科学技術を生み出すこともできなかつただろう。

B 「誰でも、いつでも、どこでも、間違いなく、繰り返し、安全に、簡単に、同じことができる」ためには、それを可能にしてくれる進歩した道具や機械が必要になる。そんな道具や機械をつくるためには、まず、自分を取り囲むこの世界、すなわち自然の成り立ちを、客観的な目で観察し、分析ぶんせきし、理解し、それを「物」として扱い、再b コウチクしなければならぬ。自然を「物」として見る目、「物」として扱う態度がどうしても必要になる。自然は、自分の外

側に自分の存在と関係なく、ゲンゼンと存在する「物」の集合であり、「物」の動きである、と信じなければならなかった。そうしなければ、科学技術の進歩は生み出せなかった。

すなわち、十九世紀から二十世紀にかけて我々が求めて来た「幸福」や「善きこと」は、自然を「物」として見る目、「物」として扱う態度がなければ獲得できなかったのだ。

これに対して、数千年前に五千キロの海を渡ることのできたポリネシア人の態度は違っていた。五千年前に、高さ二十メートルの樹の建物をつくることのできた縄文人の態度は違っていた。彼らは、自然を「物」として見ていなかった。「物」として取り扱っていなかった。自然を、自分もまたその一部である大いなる生命の現われである、と見ていた。自分と自然は、同じ生命を分かち合っている、と考えていた。そして、その態度から生まれた「技術」によって海を渡り、建物を建てていた。現実はその「能力」を持っていた。であるのに、我々は、その「能力」を忘れる道を選んだ。その「技術」を捨てた。

その理由は多分、こうだ。

まずこの「技術」、この「能力」を獲得するには、「誰でもが」、というわけにいかない。人によつて向き、不向きがあり、できる人とできない人がある。

「いつでも」というわけにいかない。同じ人でも、できる時とできない時がある。

「どこでも」というわけにいかない。場所によつてできる場所とできない場所がある。

「間違いなく」というわけにいかない。間違いはむしろあつてあたり前のことになる。

「繰り返し」というわけにいかない。繰り返しがきかないのがこの「技術」の特徴である。

「安全に」というわけにいかない。生命の危険や困難、苦しみは必ず伴う。

「簡単に」というわけにいかない。この「技術」は自然現象と同じぐらい複雑である。

すなわち、この「能力」とこの「技術」は、我々が求めた「幸福」や「善きこと」と一見背反する生き方を我々に求める道だ。だから我々は、その道を進むことをやめた。自分たちの中の「能力」が秘められていることを忘れ、「誰でもが、いつでも……」という「幸福」、「善きこと」を可能にしてくれる科学技術の道を選んだのだ。その道は、ある意味で、人間にとつての「必然」の道だった。

C、二十世紀末になって、忘れられていたこの「能力」を取り戻そうとする試みが、世界中のあちこちで同時多発的に現われ始めた。

《イ》

登山家のラインホルト・メスナー（「第一番」出演者）は、酸素ボンベや無線機、ラジオなどの科学技術が生み出した機具はほとんど持たず、たったひとりで、酸素が地上の三分の一しかない八千メートル級の山全てを登り尽くした。

海洋冒険家のジャック・マイヨール（「第二番」出演者）は、五十六歳の時、アクアラングを使わず、素潜りで水深百五メートルに到達した。

サーファアのジェリー・ロペス（「第四番」出演者）は、たった一枚の板をつかって、高さ二十

メートルにもなる津波つなみのような波をみごとに乗りこなしてみせた。

そして、ナイノア・トンプソン〔第三番〕出演者いっさいは、一切の近代航海器具を使わず、古代カヌーを、ハワイからタヒチまで五千キロの海をみごとに導いたのだ。

一九八〇年の航海でナイノアが取ったコースは、現在のGPSによって割り出されるコースとほとんど変わらないほど正確・最短のものであった。彼らは、我々の中にまだその「能力」が眠ひまっていることを証明した。

互たがいに相談し合ったり、影響えいぎょうし合ったわけではないのに、なぜ彼らは同時期に、同じような試みを始めたのだろうか。彼らの試みに共通しているのは、科学技術の恩恵を一時ひととき的に放棄ほうきすることだった。

「誰でもが、いつでも、どこでも……」
というあの「幸福」、あの「善きこと」を一時的に放棄することだった。

D、自然を「物」として見つめ、「物」として取り扱う態度の放棄だった。

そこには、彼らひとりひとりの個別の目的や動機を超こえた、全人類ぜんじんるい的な無意識②の気付きがあったような気がするのだ。

二十世紀後半になって次々に起こってきた環境問題かんきょうもんだい、異常気象、不可解な事件、人心こころの荒廢こうはい、これらがみな、自然を「物」として見、「物」として扱あつかってきた我々の生き方にキだインしているのではないか、という漠然ぼくぜんとした気付きだ。

このままの道を進めば、我々自身が破滅はめつしてしまうのではないか、という漠然とした不安、その不安が、世界的な規模の環境保護運動、ニューサイエンス、ニューエイジ、精神世界ブーム、先住民文化への関心、古代文明の再評価等々を生み出していった。これらの動きは、「不安」をベースにしている動きであるが故ゆに、さまざまな混乱こんらんや誤まりも生み出した。

しかし、この動きは、本人ひとさえ意識していない「I」の源ねんから発したものであったが故ゆに、ある正ただしさを持つていた。

自然は単なる「物」の集合ではない。

自然は単なる「物」の動きではない。

自然とは、尽つきることのない、見えない、大いなるいのちの力が、一瞬いつしゆん、「物」として立ち現れた姿であり、自然の実態は、「物」そのものの中にあるのではなく、「物」と「物」との間はざま、「物」と「物」とのIIの中にこそある。そして、この自然の本質である見えない大いなるいのちの力は、さまざまな「物」として生成・消滅を繰り返しながら、無限むげんに、永遠とわいに繋がつながり、続いてゆくものなのだ。

《ウ》

いや、この見方、この態度は、間違まちがいというより、未熟みじくであった、という方が正確せうさくなのかも知れない。私は、科学技術の進歩と、自然を「見えない大いなるいのちの力」の現われと見る自然観が、決定的にIII③するものだ、とは思っていない。いや、むしろ二十一世紀の科学技術は、

「見えない大いなるいのちの力」への畏怖の想いと、そこから生まれてくる謙虚さ、繊細さ、想像力、感謝の心によって超高度に進歩する、とさえ思っている。

(中略)

科学技術の進歩が絶滅を加速する「悪」であるはずがない。科学的思考のできる人間が母なる生命地球の癌細胞であるはずがない。自然を「物」として見る目、「物」として扱う態度が未熟すぎるだけの話なのだ。

誰でもが、いつでも、どこでも、間違いなく、繰り返し、安全に、簡単に、同じことができることのみが幸福であり、善きことである、と考える、その価値観が未熟すぎるのだ。

科学技術が悪いのではない。誰かが悪いのではない。問われているのは我々ひとりひとりの自然観・生命観・価値観なのだ。

《エ》

なにが幸福なのか、なにが豊かさなのか。人はなぜこのような知性・感性・個性を持ってこの世に生まれているのか。そして、やはり、

「人はどこから来て、どこへゆくのか」
を問いつけることこそが、人が人として生まれた理由なのかも知れない。

(龍村 仁『魂の旅 地球交響曲第三番』より)

問1 —— 線 a～d のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問2 空らん

A	く	D
---	---	---

 にあてはまることばとして最もふさわしいものの組み合わせを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|
| 1 | A | もちろん | B | ところが | C | なぜなら | D | すなわち |
| 2 | A | なぜなら | B | ところが | C | すなわち | D | もちろん |
| 3 | A | すなわち | B | なぜなら | C | ところが | D | もちろん |
| 4 | A | なぜなら | B | ところが | C | もちろん | D | すなわち |
| 5 | A | もちろん | B | なぜなら | C | ところが | D | すなわち |

問3 次の一文(段落)は文中からぬき出したものです。どこに^{もと}戻すのが最もふさわしいですか。
 《ア》《イ》《エ》から一つ選び、記号で答えなさい。

科学技術の進歩によって、自分たちが求めた「幸福」、「善きこと」をある程度獲得した段階で、人間が、自然を「物」として見、「物」として扱う態度の間違いに気が付き始めたことには、とても大きな意味があると私は思う。

問4 空らんⅠにあてはまることばを文中から三字でぬき出して答えなさい。

問5 空らんⅡにあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 関係
- 2 存在
- 3 価値
- 4 加速
- 5 交換こうかん

問6 空らんⅢには文中にあることばが入ります。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 破滅
- 2 証明
- 3 背反
- 4 分析
- 5 共通

問7 線①「ナイノアが成し遂げた最も困難なこと」とありますが、ナイノアが成し遂げたことを具体的に述べている部分を解答らん「こと」に続くよう文中から四十五字でぬき出し、はじめとおわりの五字を答えなさい。

問8 線②「無意識の気付き」とは何ですか。文中のことばを使って四十五字以上、五十五字以内で答えなさい。

(下書きらん)

	50	30
	40	20

問9 本文の主旨として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 人類が未来永遠に存続していけるよう、さらなる科学技術の進歩を目指し、努力し続ける
ていかなければならない。
- 2 科学技術の進歩を加速していくと同時に、大いなる力を持つ自然をコントロールすべく、
人類は自然への理解を深めていかなければならない。
- 3 人類の存在は大いなる生命に比べて小さいものだが、いつしか超えるべく、科学技術の
進歩を目指していかなければならない。
- 4 科学技術の進歩を考える際には、大いなる生命に対する姿勢を見つめ直し、人類の未来
につなげていくことが大切である。
- 5 人類の発展を考える上で、未来永遠に続く幸福や豊かさのあり方を追求し、科学技術の
進歩を願い続けることが必要である。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

長女・琴美、長男・光彦、双子の次女・三女、小春とるり、二男・凌馬、三男・真歩の六人きょうだいは、父・星則を亡くし、それぞれにその死に対する思いを抱えていた。母・律子は一人で、天井に星形の小窓がある喫茶店「星やどり」を経営していたが、閉店せざるを得ない状況に追いこまれていった。そこで、きょうだいたちは店をなくしたくない一心で店の手伝いを始めるが、そんな折、琴美の妊娠がわかる。以下はそれに続く文章である。

「この店がなくなるかもしれないって聞いたとき、正直、ほっとした」
うん、と、母が頷く。

「お母さんがギリギリなのは見てわかったし、私だって休みのたびに店を手伝うのは正直大変だった。……最近体調も悪くて、何か ① 変な夢を見るようになってね」

琴美はきょうだいたちをぐるりと見回す。

「夜、眠ろうと思って目をつむると、瞼の裏にパーって星みたいなものが弾けて、夢が始まるの。その星みたいなものはね、一回ずつ数が増えてくんだよね。見る夢ってのも、夢っていうか、まるでみんなを観察してみたい映像で……。上から覗いてるっていうか」琴美はここでひとつ咳払いをして、続けた。「光彦がへったくそな面接してるどころ、真歩が海辺で大和さんの前で泣いているところ、小春がお母さんと武内さんがファミレスで会っているのを見つけるところ、凌馬があおいちゃんの弁当を作るって約束するところ、るりが茶髪の女の子と保健室でケンカするところ」

「へったくそって……」「別に僕泣いてなんかもないもん」「弁当の話は言うなつつつただろ！」ひとつひとつ琴美が話していくたびに、いろんなところから声が飛んでくる。それが楽しくて、琴美はつい頬をゆるめてしまう。

「その夢はね、次の日現実になるの。だから、みんなのバランスが崩れそうになるときは、先回りして動くことができた」

「そんなこと、ありえるの？」

「実際に、あったの」驚く真歩に、琴美は微笑む。

「そのおかげで、みんなにはお節介だっと思われたかもね。凌馬は裏で私のことエスパードって言うってみたいだし」るりが凌馬に向かって、バカ、と言いつける。

「でも、お母さんが倒れたときもそばにいられたから、よかった面もあったんだけど」

琴美はもう冷めてしまった紅茶を一口飲んで、続けた。

「夢で見たことが現実になるってさすがに気味が悪くて、孝史に相談したの。そしたら、産婦人科へ行こうって」

「さんふじんか？」真歩がひらがなで尋ねる。

「そう。私もどの科に行けばいいのかわからなかったから、産婦人科ってびっくりしたんだけど

ね、そしたら、おめでとうございますって」

小春とるりが嬉しそうに目を見開く。

「妊娠するときに不思議なことが起きる人って、けっこういるらしいの。例えば、お腹の中の子が夢に出てきて、自分の名前を名乗ったり……お腹の中にいたことを覚えてる子がいる、っていう話もよく聞くでしょ。そういうことが起きやすい時期なんだって。お腹の中に新しい命があるってだけでも不思議なことなのに」

うん、と、るりが眉を下げて頷いた。

「確かに、そんな夢を見るようになったのはここ最近のことなの。昔はそんな不思議な夢なんて見たことなかった」

② 琴美は妹ふたりの表情を見て、女子のほうが男子よりも早く大人になるんだな、と改めて思った。

「子どもがいるってわかったとき、お腹の子がああ夢を見せてくれてたんだらうなって思った。

この子が、私たち家族がバランスを保てるように助けてくれていたんだなって」

変なこと言うかもしれないけど、と前置きして、琴美は続ける。

「お父さんが入院する前日、私、言われたんだ。みんなをよろしくなって。この子が見せてくれた夢はね、お父さんが私に託した、長女としての最後の仕事なんだと思う。だけど、私は、そんな長女の最後の仕事も」

うまくできなかった。

急に喉が締め付けられるようになって、言葉が出てこなくなった。

お父さん、家族みんな、お父さんが思っているより、ずっとずっと強い。私は、お父さんが思っているよりも、ずっとずっと弱い。

父の低い声が、何度も何度も頭の中で蘇る。

お母さんは倒れて、店はなくなる。私は、お父さんの大切なものを何一つ守ることができなかった。

「琴美、あなたはもう、早坂家の長女じゃなくていいのよ」

ことみ。

ことみ、と、この家族の中でただひとり、私のことをそのままの名前で呼んでくれる声。

「長女の役目はもう終わり」

その声は、いつだって、私の味方をしてくれる。

「これからは、孝史くんの妻、そのお腹の子の母として生きていきなさい」

③ 両方の瞳が、奥のほうからあたたかくなっていく。琴美は、体の底から湧き上がる何かを堪えようと大きく息を吐いた。

家族の顔を見つめながら、言葉が何も出てこない。

みんな、誰かの子として生まれ、その家族として育つ。だけど、いつかはその家を出て、大切

な誰かとまた新しい家族を築いていく。

家族は生まれ変わっていく。ひとり生まれ、ひとり出ていき、ひとり生まれ、ふたり出ていき、また新しいかたちになる。

「みんな、覚えてる？ お父さんが入院する直前、急にこの天窓を作り始めたこと。それに、真歩の名前を決めるときだけ、お父さんがやたらと自分の意見を押し通したこと」

ねえ琴美、覚えてる？ 母がそう言って、視線を上に向けた。

「お父さん、この天窓を作った理由、誰にも話さなかったでしょう」

「そりゃ、星やどりって店名に変えるために、窓を作ったんじゃねえの？」光彦はテーブル備え付の紙ナプキンを細かくちぎっている。

「いくら聞いても、ちゃんと答えてくれなかったよね。店名を変えたのもいきなりだったし、あのときはちょっと、お父さんどうしちゃったんだろうって思った」

るりの言葉に母が頷く。

「天窓を作ったときね、お父さん、絶対内緒だぞって言ったのよ。俺がいまこれを作る理由は、誰にも言うなって。だけどもういいよね。この窓の役目も終わった」

母は、すう、と息を吸ってきようだい全員を見渡した。

「お父さんの名前は、星則でしょう。そして、お母さんは」

母は、自分のことを指さす。

「りつこ」続いて、ひとさし指が琴美に向けられる。

「ことみ」指先がゆつくりと時計回りに円を描いていく。

「みつひこ」

「こはる」

「るり」

「りょうま」

「まほ」

最後に母は、指先を上に向けた。

「ほしのり」

あ、と、真歩が声を漏らした。

「A？」

全員が同時に、息をのんだのが分かった。

「そう。ほしのりからまた、りつこに戻る。家族がひとつの輪になる」

母はゆつくりと、テーブルに沿って視線を動かした。

「いまあなたが座っている位置は、お父さんが描いた、私たち家族の輪」

母、律子から時計回りに、琴美、光彦、小春、るり、凌馬、真歩。父、星則が繋ぎたかった家

族の輪。

④ 自分がいなくなってしまう前に結びたかった、世界でたったひとつの輪。

「お店の名前、ほしやどり、でしょう。私もそんなロマンチックな名前やめようって止めたんだけどね、でも」

母は天窓を指す。

「お父さんは、ほしのり、が欠けて途切れてしまう輪を、ほしやどり、で繋ごうとしたの」
カン、カン、と、琴美の頭の中で、トンカチと釘がぶつかる音が響いた。

店を休業させてまで、天窓の工事をしていた父の後ろ姿。どうしてそんなもの作ってるの？
きょうだいの誰が聞いても父はこう答えるだけだった。

いつかわかるよ。

いつか、わかる。

あのとき、父はもうわかっていた。だから、一番下の子が男の子だと分かったときも、まほという名前を貰き通した。もうすぐ、自分がいまのように動けなくなることに。この先、新しいきょうだいが生まれることはきつとないということ。

「この天窓、小空って呼ばれているでしょう。私たちが店の中から、空を眺めることができる小さな空。でもお父さんは、こう言ってたのよ」

母は、天窓の向こうを見ている。

「空から、子どもたちの成長を覗き見られるように、ここにも窓を作っておこう」

そこにいる父と目を合わせているように、目を細めて、母は天窓の向こうを見ている。

「これはね、私たちが空を見るための天窓じゃないの。お父さんが空からこの店の中を見るための、のぞき穴。みんなにはれないように、お父さんは天窓だって言い張ってたけどね」

母は 頬をゆるませる。

「さつき琴美は、夢は、みんなを上から覗いているような映像だったって言ってたよね。それに、夢を見る前に、瞼の裏に星が広がる、とも」

琴美はうなずく。

「お父さんが、この星型の天窓から覗いた光景を、いち早く琴美に教えてあげようとしてたのかもね」

笑うとできるしわが、深く、多くなっている。母は続ける。

「お父さんが上から店の中を覗いて、もう安心だって言ってくれるくらいみんなが大きくなるまでは、この店を守り続けようって、私は誓ったの」

でもね、と天窓を見上げたまま、母は眉を下げた。今日も連ヶ浜の夜空にはいくつもの星が瞬いている。

「もう、じゅうぶんだよね」

お父さん、と、母が天を呼ぶ。

「子どもたちだけでお店ができるくらい、みんな立派に育ったんだもの。お父さんも見てたよね。今日の店の中。今日は晴れてたから、よく見えたはず」

店を立て直そうという話し合いがあつてから、母は、必要最小限のことしか店のことを手伝わなかつた。きょうだいだけで店を営む姿を、たった一日だけでも、天窓越しの父に見せたかつたから。

「お父さん、もうじゅうぶん見届けたよね」

⑤ だから、と言う母の頬に、涙がなみだ一筋、ゆっくりと伝つた。

「もう、【星やどり】の役目も、終わりにしていいよね」

(朝井リョウ『星やどりの声』より)

問1 ……線ア「息をのんだ」、イ「頬をゆるませる」の意味として最もふさわしいものを次から

一つ選び、それぞれ番号で答えなさい。

ア「息をのんだ」

1 驚いた

2 興奮した

3 冷静になった

4 怖くなった

イ「頬をゆるませる」

1 思い出して、ほほえむ

2 気まぎらくなって、苦笑する

3 意地を張って、冷笑する

4 昔をふり返って、涙ぐむ

問2 ……線①「変な夢」とありますが、どういう夢ですか。最もふさわしいものを次から一つ

選び、番号で答えなさい。

1 来店した客の様子がわかる夢。

2 星となつて空の上から全てを見渡す夢。

3 家族の未来を知ることが出来る夢。

4 過去をふり返る機会を与えてくれる夢。

問3 ——線②「琴美は妹ふたりの表情を見て、女子のほうが男子よりも早く大人になるんだな、と改めて思った」とありますが、「琴美」はこのとき、なぜこのようなことを思ったのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 弟たちは姉が見た変な夢の内容を現実世界と照らし合わせてありえない事としてとらえている一方、妹たちはその夢はうそだとわりきり姉の妊娠を喜んでいる様子だったため。
- 2 弟たちが自分本位な主張ばかりして、姉を困らせている一方、妹たちはその弟たちをしかったりなだめるなど姉を喜ばせるようなともしつかりとした行動をとっているため。
- 3 弟たちは姉の妊娠や夢の話におのおの勝手な反応を示している一方、妹たちは妊娠について喜びつつその不思議な話にも真剣に耳をかたむけているため。
- 4 弟たちは姉の妊娠を当然のことにように理解している一方、妹たちは妊娠を自分のことのように感じて喜ぶなど新しい家族をむかえる態勢をすでに整えつつあるため。

問4 ——線③「両方の瞳が、奥のほうからあたたかくなっていく」とは「琴美」のどのような状態を言っているのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 父の家族に対する考えを引き継げなかったことを、母にやさしく励まされてかなしく感じている。
- 2 父の遺言を琴美だけに背負わせてしまったと感じた母が家族の新しいあり方を提案し、そのやさしさに触れたことで泣いてしまっている。
- 3 父からの課題を達成できなかったという悔しい思いを、母にぶつけてしまったことを申し訳なく思っている。
- 4 父の期待に応えることができなかったという気持ちを察して、母がやさしいことばをかけてくれたことで涙がこぼれそうになっている。

問5 空らん A に入ることばをひらがな四字で考えて答えなさい。

問6 ——線④「自分がいなくなってしまう前に結びたかった、世界でたったひとつの輪」とありますが、輪を結ぶために星則がしたことは何ですか。二十字以内で答えなさい。ただし、一番下の子に「まほ」と名付けたことは除きます。

問7 ———線⑤「だから、と言う母の頬に、涙が一筋、ゆつくりと伝った」とありますが、このときの母の気持ちを説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 父が伝えたかった思いは子どもたちに伝えられなかったと感じ、自分のやってきたことへのけじめをつけようとあきらめを感じている。
- 2 父の思いのこもった店がなくなってしまうことは寂しいが、子どもたちの成長を見て、自分の立てた誓いは果たせたと感じている。
- 3 店を閉じてしまったことに対して後悔を感じてはいるが、自分のやってきたことは間違いでなかったと誇らしく思っている。
- 4 子どもたちの思いをかなえてあげられないことを悔しく感じ、店は閉まるがこれからも子どもたちのためにがんばろうと思っている。

(問題は次のページに続く)



3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

原っぱ 長田 弘

原っぱには、何もなかった。ブランコも、遊動円木もなかった。ベンチもなかった。一本の木もなかったから、木陰もなかった。激しい雨が降ると、そこにもここにも、おおきな水溜まりができた。原っぱのへりは、いつも 草むらだった。

きみがはじめてトカゲをみたのは、原っぱの草むらだ。はじめてカミキリムシをつかまえたのも。きみは原っぱで、自転車に乗ることをおぼえた。野球をおぼえた。はじめて口惜し泣きした。春に、タンポポがいつせいに空飛ぶのをみたのも、夏に、はじめてアンタレスという名の星をおぼえたのも、原っぱだ。冬の風にはじめて大風を揚げたのも。原っぱは、いまはもうなくなってしまった。
原っぱには、何もなかったのだ。けれども、誰のものでもなかった何もない原っぱには、ほかのどこにもないものがあつた。きみの自由が。

〔深呼吸の必要〕より

問1 この詩の表現形式としてふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自由詩
- 2 定型詩
- 3 散文詩

問2 空らん に入る語として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 ふかふかの
- 2 すかすかの
- 3 ぬくぬくの
- 4 ぼうぼうの

問3

——線「原っぱには、何もなかった」とありますが、この直後に「なかった」ものの具
体例としてあげられている「ブランコ」「遊動円木」「ベンチ」などについて説明したもの
して最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 遊び方や使用目的が既に限定されているようなものである。
- 2 遊び方や使用目的があいまいで使い方が不明なものである。
- 3 遊び方や使用目的が原っぱの魅力を高めるためのものである。
- 4 遊び方や使用目的が幅ひろくて誰もがつかえるものである。

問4

詩の中の「きみ」は過去の作者自身を表すと考えたとき、その作者の心情として最もふさ
わしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 大人になった今、「原っぱ」で過ごした少年時代を思い出すと、虫取りに興じていた頃の
幼い自分にも星を眺めて宇宙の神秘に目覚める確かな成長があったのだと改めて気づき、
その成長を支えてくれたあの日の何もなかった「原っぱ」に強く感謝せずにいられなくなっ
ている。

- 2 大人になった今、「原っぱ」で過ごした少年時代を思い出すと、「原っぱ」には何もなかつ
たけれども、当時はあえて何もないことで自由を楽しませる配慮ある社会であったのだと
改めて気づき、今はそうした配慮が失われてしまった社会になったことを悲しく思ってい
る。

- 3 大人になった今、「原っぱ」で過ごした少年時代を思い出すと、何もない「原っぱ」で自
由に過ごしたからこそ、さまざまな経験を重ねることができたのだと改めて気づき、失わ
れた「原っぱ」に少年時代を重ねてなつかしさを感じている。

- 4 大人になった今、「原っぱ」で過ごした少年時代を思い出すと、季節ごとに「原っぱ」で
の楽しみ方もいろいろと異なっていて、それなりに工夫をしていたと改めて気づいたが、
一方ではもっと別の楽しみ方もあったはずだと残念に思っている。

問5

この詩に何度も用いられる「原っぱ」という語のイメージを説明したものとして最もふさ
わしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 力強さと はつらつさ
- 2 素朴さと 親しさ
- 3 幼稚さと 純粹さ
- 4 楽しさと はなやかさ

4 二〇二〇年、東京でオリンピックが開催かいざいされます。そこで、五輪マークの色にちなんだ表現を調べてみたところ、次のようなものが見つかりました。これについて、後の問いに答えなさい。

1	青は	X	より出でて	X	より青し
2	くちばしが	「	」	色い	
3	「	」	子の手を	Z	
4	柳 <small>やなぎ</small> は	「	」	花は紅 <small>くれない</small>	
5	「	」	白の差		

問1 五輪マークの色は、1の「青」以外に2～5の空らん「」に入る四色があります。

次あげるア～オのうち、2～5の空らん「」に入らないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 緑 イ 黒 ウ 茶 エ 赤 オ 黄

問2 1は「出らんのほまれ」と同じ意味になりますが、空らん X に入れるのにふさわしいものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 草 イ 紺こん ウ 空 エ 藍あゐ オ 水

問3 2と同じ意味になるよう、次の空らん Y に入る漢字一字を答えなさい。

Y 二才

問4 3は、物事がやすやすと行えることを表しますが、空らん Z に入れるのにふさわしいことばを、ひらがな三字で答えなさい。

問5 4は、四季のうちのある季節の美しい景色を表していますが、ふさわしい季節を答えなさい。

問6 5が表していることと反対の意味になるものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 所変われば品変わる
- イ 月とすっぽん
- ウ 木を見て森を見ず
- エ 五十歩百歩
- オ 待てば海路の日和あり

問7 「はだか（裸）」や「うそ（嘘）」とともに用いたとき、「まったくの」「すっかり」といった意味になる色をふくんだ表現を、内の1～5から一つ選び、番号で答えなさい。



(問題は前のページで終わり)

